

秋元康



1分後の昔話

■「目標、は書き換えてもいい」

とりあえず、歩き出そう

あきもと・やすし
作詞家。AKB48総合プロデューサー。高校時代から放送作家として頭角を現し、数々の番組構成に携わる。作詞家として、美空ひばり「川の流れるように」をはじめ、数多くのヒット曲を生む。2011年、第53回日本レコード大賞を受賞(AKB48「フライングゲット」)。京都造形芸術大学副学長も務める。

ンバーが何人か辞めたのだが、スタッフから報告を受ける度に、「また戻りたくなかったら、いつでも、オーディションに再チャレンジできるよ」としてあげて欲しい」と僕はお願ひする。辞めずに頑張っているメンバーがいる以上、無条件に戻ってもいいとは言えないが、オーディションに受ければ戻ってもいい。

は(いや、AKB48に限らず、オーディションを受けに来るコたちは)、偉いなと思う。こんなに若いうちから自分の意思で、目標に向かってまず第一歩を踏み出したのだから。それは明確な目標というより、何となく「アイドルになりたい」「テレビに出たい」「有名になりたい」と思ったくらいの動機かもしれないが、何であれ踏み出せば、今とは違う景色が見えて来る。

最近、NMB48(大阪の難波の劇場を中心に活躍するAKB48の姉妹グループ)のメ

なんとなく、アイドルのオーディションを受けに来たように、なんとなく、「辞めよう」と思った「もいるはずだ。若ければ、判断を誤ることもある。一度、決めたら、意地でもやり遂げる」ことは大事だと思ふが、そんな意志の強い人間はほんの一握りだ。たいていの人は、「挫折」、「あきらめ」、「後悔」を繰り返す。だから、何度、目標の途中で挫折しても、また、やり直せばいい。つらかったら、自分の都合で違う「目標」を掲げればいいのか。前言を翻しながら、人は成長する。(次回は1月27日掲載予定)

7年前にAKB48が結成された時、劇場支配人がその奮闘ぶりをファンに伝えようとブログを始めることになった。「どんなタイトルがいいですかねえ?」と聞かれたので、「何か、目標みたいなものを掲げた方がいいな」と答えたら、「東京ドームまでの軌跡」に決まった。当時は、秋葉原に小さな劇場を作って、僕が何をしようとしているのか?誰にも理解してもらえなかった。東京ドームでコンサートができるようなアイドルを目指している」というようなわかりやすいイメージが必要だったのだ。

目標は大雑把でもいい。あつちの方向に歩いて行けばいいんだという目安で構わない。

中には、明確な目標を自分に課して精進する人もいるが、そこまで今の自分と未来の自分を繋ぐ道を描ける人は少ないだろう。ましてや、若い頃は、自分がどうなりたいか、何を望んでいるか、心の声を聴くのは難しい。

だから、AKB48のオーディションを受けに来るコたち

